中学生の将来志向性の特徴

ー 性差及び小学生と比較した学校段階の差に着目して ー

山上 寛子*

Characteristics of future orientation in junior high school students:

ー Focused on gender differences and disparity in ages of elementary school and junior high school students ー

YAMAGAMI, Hiroko

要旨

思春期に入ったばかりの中学生は，自分の将来への夢は未だ不確かであり,「志向する生き方」についても非現実的で，漠然としたイメージを描いていることが考えられる。本研究では，その中学生に焦点をあて，中学生が自分の将来についてどのような夢や希望を持ちどのような生き方を志向しているのか，性差及び小学生と比較した学校段階の差に着目して，中学生の将来志向性の特徴を明らかにすることを目的とする。性差と小・中の学校段階の差を検討するために，性別と学校段階を独立変数，将来志向性の良識・向上志向，家庭志向，金持ち志向の各得点を従属変数とした２要因分散分析を行った結果，将来志向性の性差については，家庭志向は男子に比べて女子が，金持ち志向は女子に比べて男子の得点が有意に高いことが明らかにされた。また，将来志向性の小・中学校の学校段階による差については，良識・向上志向，家庭志向，金持ち志向のいずれにおいても，中学生に比べて小学生の得点が有意に高く，小学生の方が自分の将来を意欲的・肯定的にとらえていることが示された。

キーワード

中学生，将来志向性，性差，小学生と比較した学校段階の差

Abstract

Junior high school students in early adolescence usually have uncertain dreams about their future. Their images of “life orientation” are vague and unrealistic. The present study examined junior high school students’ dreams and hopes for their future and the types of life they intend to live by focusing on gender differences and differences between elementary school and junior high school students. We conducted a two-way analysis of variance with gender differences and developmental stages as independent variables and three types of future orientation scores (improving good sense orientation, family orientation, and rich-person orientation) as dependent variables. The results indicated that elementary school students had significantly higher scores than junior high school students for the three orientation types, suggesting that elementary school students might perceive their future more positively and ambitiously than junior high school students. Moreover, girls had significantly more family orientation than boys. In contrast, boys showed significantly more rich-person orientation than girls.

Key words

Junior high school students, Future orientation, Gender differences, Differences depending on developmental stages

問題と目的

Ⅰ．若者の将来への意欲の乏しさの傾向

自分の夢や希望を思い描く時期である若者の将来への意欲の乏しさを懸念する報告がなされている。内閣府(2020)は，満13～29歳の若者10,000人を対象に，若者を取り巻く諸課題をどのように考えているのかについての調査を行ったところ,「将来よりも今の生活を楽しみたい」と答えた人の割合は全体の60.4%であることを報告した。南(2015)は大学生を対象に調査を行い，現代の若者の価値観には「将来無関心」「私生活主義」「現在重視」が見られ，それらが互

＊ 聖徳大学大学院　児童学研究科　児童学専攻　博士後期課程

いに関連していることを見いだした。７カ国(アメリカ，イギリス，ドイツ，フランス，スウェーデン，韓国，日本)の満13～29歳の若者を比較した６項目(自己認識，家庭，学校，友人関係，職場，結婚・育児)の意識調査では,「あなたは自分の将来について明るい希望を持っていますか」という問いに対して，希望を持っている人の割合は，他国の若者に比べて我が国は最下位(61.6%)であり，日本の若者は諸外国と比べて，自分の将来への明るい希望が希薄であることが報告された(内閣府，2014)。

Ⅱ.若者が自分の将来に目を向けることの重要性

将来への意欲の乏しさが報告される一方で，若者が自分の将来に目を向けることの重要性が指摘されている。西村・鈴木・村上・中山・櫻井(2017)は中学生719人を対象に将来の生き方を重視することが，生活満足度・自律的学習の動機付け・向社会的行動に関連することを明らかにした。西村ら(2017)の結果は，将来の生き方を重視することはキャリア教育領域のみにとどまらず，学校教育において期待されるポジティブな変数を促進する役割を有することを示唆している。原・古田・村松(2011)は，小学校５，６年生を対象に「未来志向」がストレスの多くある状態でもセルフエスティームを高く保つことに役立っていることを明らかにし，松田・佐藤(2013)も大学生を対象として，若者が将来を肯定的にとらえることが意欲的な行動を起こさせるための重要な役割を担っていることを明らかにしている。

Ⅲ．中学生の発達的特徴と中学生を対象とした研究の必要性

1. 中学生の発達的特徴

若者の中でも，特に中学生は，友人関係・親子関係の変化や進路の問題を抱えるなど，心理社会的発達の上で特に重要な時期であり，いじめ，不登校，引きこもり等の生徒指導に関する問題行動等，思春期特有の大きな課題を抱えやすいとされている。落合・伊藤・齋藤(2008)は,中学生が,特に，精神的身体的に不安定になりやすいことを指摘し，これは，中学生自身に起こる急激な発達と環境の変化に対して，精神面での発達の変化が伴わないことに起因することが想定される。

しかし，中学生が自分の将来への夢や希望を思い描くことによって，日常の学習や生活への意欲に影響を与え，その後の生き方への方向付けがなされ，生活への充実感が得られると考えられることから，中学生の将来のとらえ方について検討することが必要とされる。例えば，仲間関係においてストレスフルな出来事があったとしても，中学生がこんな生き方をしたいという将来への夢や希望が，それを乗り越える力となり得るであろう。

2. 将来への夢や希望の在り方に関連する概念

心理学の領域では，将来への夢や希望の在り方に関連する概念として，時間的展望の中の未来展望がある。時間的展望は,“ある一定の時点における過去及び未来についての見解の総体”として定義され(Lewin，1951)，過去・現在・未来という時間軸という観点から，過去展望，現在展望，未来展望の３つに分けられる。未来展望は，時間軸の一視点として未来をとらえることから時間的展望の中の一概念とされ(白井，1994；1997)，人が自己の未来にどのような出来事を予測するかという認知的側面と，自己の未来に対してどのような感情をもっているかという情緒的(態度的)側面の２面性をもっている(都筑，1982；陳・茂呂，2016)。

若者の未来展望の認知的側面を検討している先行研究は多くは見られないが，数少ない研究には，田中(2018)，日潟(2016)，日潟・齋藤(2007)がある。一方，情緒的側面を検討しているものには，永田(2020)，西村ら(2017)，山本・岩元・原口(2012)，山本(2011)など，多くの先行研究がなされてきている。

情緒的側面を検討した研究の中でも，飛永(2007)は，公立小学校５年生から高校２年生までの1729人を対象に調査し，未来展望の情緒的(態度的)側面は，現実性・具体性の観点から，抽象的で現実性に乏しいとされる「希望」と，未来への見通しとして現実的で具体的である「展望」という下位概念の２側面で構成されることを，自由記述を内容分析しカテゴリー化することで明らかにした。「希望」が自己の能力にとらわれない非現実的な側面を持ち，抽象的で現実性に乏しいとされる反面,「展望」は未来への見通しであり，生活の仕方(結婚や就職等)から特定の集団(大学等)への帰属等を含む現実的で具体的な未来の側面であることを示している。Oettingen & Mayer(2002)もまた，現実性(起こりうる可能性)という観点から，ミュンヘン大学の大学生を対象に，未来展望には「空想的未来展望(fantasy)」と「予期的未来展望(expectation)」の2つの下位概念があることを見いだした。Oettingen & Mayer(2002)の「空想的未来展望」は飛永(2007)の「希望」,「予期的未来展望」は飛永(2007)の「展望」とほぼ同じ概念であることが考えられる。

3. 中学生を対象とした未来展望研究の必要性

これまでの若者の未来展望の情緒的(態度的)側面を検討した先行研究は,主に高校生や大学生を対象としており，中学生の未来展望を取り上げた先行研究は数少ない。中学生の未来展望の情緒的(態度的)側面を検討した先行研究には，上記の西村ら(2017)の他，金木・塚野(2002)，元

森(2009)，都筑(2001)，白井(1997) がある。しかし，これらは，未来展望の情緒的(態度的) 側面の中でも，抽象的で現実性に乏しいとされる「希望」に属する概念を検討している。

例えば，金木・塚野(2002) は，中学生の学校生活，友人関係についての意識調査により生徒を類型化し，学校社会適応と仲間志向の高い「適応型」，学校社会適応は高いが仲間志向の低い「勉強型」，学校社会適応は低いが仲間志向の高い「逸脱型」，学校社会適応も仲間志向も低い「孤立型」のタイプがあることを見出した。そして，それぞれのタイプに未来に対する価値づけの理由22項目について尋ねたところ，学校社会適応と仲間志向も高い「適応型」の生徒は未来に対する希望意識が高いことを明らかにしている。

また，元森(2009) は，抽象的で現実性に乏しいとされる「希望」の性差の傾向を示している。つまり，小・中・高校生を対象に，自分の将来像をどう思い描いているかについて「幸せになっているか」「多くの人の役に立っているか」「親を大切にしているか」「自由にのんびり暮らしているか」など等８項目の調査を行い，男子は社会貢献，女子は家族との未来が将来像の幸せの決め手であることを明らかにしている。

さらに，都筑(2001) は，将来への希望という観点から，学校生活に対する不安と希望がどのように変化するかについて10項目の質問項目による調査を行ったところ，中学生と小学生を比べた縦断的検討から，年齢が上がるにつれて将来への希望は低下し，空虚感は上昇することを明らかにした。白井(1997) もまた，小学生から高校生までの縦断的調査において，将来への希望が発達と共に一貫して減少していることを明らかにしている。両者の研究から，小学生から中学生へと年齢が上がるにつれて将来への希望が低下していくことが示され，発達とともに自分の将来を肯定的にとらえられなくなることが示唆されている。

上記でも述べたように，これらの先行研究(西村ら，2017；金木・塚野，2002；元森，2009；都筑，2001；白井，1997) は，未来展望の情緒的(態度的) 側面の中でも，抽象的で現実性に乏しいとされる「希望」に属する概念を主に検討しており，現実的で具体的な未来への見通しである「展望」を扱ってはいない。これは，思春期に入ったばかりの中学生の未来展望はいまだ不確かなものであり，非現実的な側面をもっているからかもしれない。

Ⅳ．「希望」「展望」の両面を含んだ中学生の未来展望検討の必要性

中学生の未来展望の情緒的(態度的) 側面は，飛永(2007) の「希望」も「展望」も両方の概念を含んでいることが考えられる。

例えば，ベネッセ教育総合研究所(2022) は，中学生4,550人と高校生6,051人を対象に，将来なりたい職業についての調査を行った。その結果,「なりたい職業がある」と答えた人の割合は中学生も高校生も大きな差は見られなかった(中学生62.0%，高校生66.8%) が，どうしたらその職業に就くことができるのか,「なりたい職業を調べる」人の割合は中学生が60.6%，高校生82.4%と中学生に比べて高校生の方が高いことを報告している。つまり，中学生の未来展望は,「なりたい職業がある」という飛永(2007) の「希望」的な側面と,「なりたい職業を調べる」という「展望」的な側面との両方の概念を含んでいるが,「展望」的な側面は高校生に比べて未だ漠然としていることが考えられる。また，上記の都筑(2001) の報告によれば，小学生から中学生へと年齢が上がるにつれて将来への希望が低下していくことが示され，発達とともに自分の将来を肯定的にとらえられなくなることが示唆されている。これは，中学生が将来を具体的に考えることによって，将来への「希望」的な側面に加えて「展望」的な側面をもつことで起こる，中学生の将来志向性の発達的特徴の一つではないかと推察される。

つまり，中学生の未来展望は，中学生が描く将来の現実生活への生き方や価値観，前向きな意欲を含んでいることから，飛永(2007) の「展望」的な側面を持つとともに,「将来はこういう生活をしたい」「こんな生き方をしたい」といった漠然としたイメージを含んでいることから,「希望」的な側面を持っているとも考えられる。したがって,「希望」と「展望」との両面を含んだ中学生の未来展望を検討することが必要とされる。

Ⅴ．「希望」「展望」の両面を含んだ中学生の未来展望の先行研究の問題点

山上・相良(2019) は,「希望」も「展望」も両方の概念を含む中学生の未来展望の情緒的(態度的) 側面を「中学生の将来志向性」として,「自分の将来の生き方へのイメージを強くはっきりともつこと」と定義し,「希望」と「展望」の両方を含んだ中学生の未来展望を測定する「中学生向け将来志向性尺度」を作成した。そして，X県F地区の田園地帯に属する中学１・２年生 224人(回答率99%) を対象に，中学生向け将来志向性尺度を用いて調査を行い,「男子は女子よりも金持ち志向が高く，家庭志向が低い」という，中学生の将来志向性の一定の性差の傾向を明らかにしている。

しかし，山上・相良(2019) には，発達とともに「希望」と「展望」がどのように変化していくのかという，将来志向性の年齢差は検討されてはいない。そこで，小学生と比較した中学生の将来志向性の学校段階の差を明らかにする

ことにより，都筑(2001)，白井(1997) によって得られた「希望」の年齢差が,「希望」と「展望」の両方を含む，中学生の将来志向性の学校段階の差にも見られるかどうかを確認することが必要とされる。

Ⅵ. 将来志向性の性差の再現性，及び，性差と学校段階の差の大きさ検討の必要性

1. 将来志向性の性差の再現性検討の必要性

心理学の近年の動向をみると，研究の頑健性確保のために一度得られた結果についての再現性の検証の必要性が指摘されている(国里，2021；三浦，2017；森口，2016)。本研究でも，山上・相良(2019) で得られた将来志向性の性差の信頼性を担保するために，別サンプルによる再現性を検証することが必要であると考える。

2. 性差と学校段階の差の大きさの検討の必要性

鈴川・豊田(2011) は，効果量による，実質科学的な差の大きさの比較検討が必要であることを述べている。効果量(effect size) は，データの単位に依存しない標準化された効果の程度を表す指標で，単位の異なる研究から得られた効果の比較や，人数の異なる研究から得られた効果の比較が可能であるが，現状としては効果量が報告されている研究は，特に日本国内の論文誌に掲載されている論文では数が少ない(水本・竹内，2008)。

先に述べた先行研究(山上･相良，2019;元森，2009;都筑，2001；白井，1997) では，性差，および，年齢差は示されてはいても，効果量による差の大きさは検討されては来なかった。そこで，性差と年齢差の有無という従来の研究での議論に加え,その違いの大きさはどのくらいであるのか,効果量の大きさについて，新たに検討して言及することが必要とされる。

これらを踏まえ，本研究では，先行研究(山上・相良，2019) の将来志向性の性差の再現性を検証するとともに，先行研究(都筑，2001；白井，1997) の「希望」で見られた年齢差が中学生の将来志向性でも見られるかどうかを，小学生との比較を通して検証し，中学生の将来志向性の特徴を明らかにすることを目的とする。

研究の方法

調査時期と対象者

X県公立小学校の児童(X県E地区JR駅近郊の住宅地にあるA・B小学校の５～６年生214人；男子118人，女子96人)とC･D中学校の１～２年生457人；男子224人，女子233人)を対象に2012年10月に実施した。A・B小学校もC・D中学校も，X県の同一地域から選択し，４校共にJR駅近郊の住宅地に存在し,家庭環境や世帯構成も比較的類似している。また，X県Y市実施の生活・学習意識調査１でも，自律性と社会性の両項目において類似した傾向が確認され，小・中学校共に同一条件に近い学校であると考えられる。

将来志向性の性差及び小・中の学校段階の差を検討するにあたっては，小学生と中学生を対象に実施した調査を統合して比較検討を行う。

なお，本研究では，性差と学校段階の差の有無を統計的仮説検定によって検討した後，効果量を用いてその差の大きさを検討する。小・中のサンプル数には大きな差が見られるが，差の大きさの検討にはサンプルサイズに影響されない標準化された指標である効果量を用いることから，結果の解釈には支障はないものと考える。

手続き

調査は質問紙を用い，クラス担任による一斉方式で実施し，その場で回収された。

調査に際しては，学校長からの承認を得た上で，研究対象とする小・中学生には，調査は無記名で行われ児童・生徒本人が特定されることはないこと，回答用紙が調査者以外の目に触れることはないこと，回答は任意であること等を口頭と文書によって児童・生徒に学級担任から説明をしてもらい，対象児童・生徒の回答によって調査協力を得たものとした。代諾者である保護者には，事前に学級担任を通して説明文書を配布し，同意を得た。

なお，本調査は，聖徳大学の「ヒューマンスタディに関する倫理委員会」の承諾を得て行った(承認番号：H24U008)。

調査内容　質問紙は次の項目から構成された。

将来志向性：山上・相良(2019) の中学生向け将来志向性尺度は,「良識・向上志向」下位尺度４項目,「家庭志向」下位尺度３項目,「金持ち志向」下位尺度３項目の３下位尺度10項目から構成されている。回答は「４；とてもそう思う」「３；そう思う」「２；少しそう思う」「１；全く思わない」の４件法で行った。なお，中学生向け将来志向性尺度は中学生向けに作成された尺度であるが，本研究では小学生にも適用可能かどうかの判断を確認的因子分析により行い，可能であることを確認した上で小学生にも使用した。

結　果

将来志向性尺度の因子構造の確認

将来志向性は，良識・向上志向，家庭志向，金持ち志向の３因子が想定された。そこで，この分類による因子構造の適合度を検討するために，中学生向け将来志向性尺度を用いて小学生と中学生のそれぞれに，確認的因子分析を行った。

Table 1　将来志向性尺度の確認的因子分析

項目内容	確認的因子分析標準化推定値					
	F1		F2		F3	
	小学生	中学生	小学生	中学生	小学生	中学生
良識・向上志向						
小；α=.70, *M*=3.29, *SD*=.63, 中；α=.74, *M*=2.96, *SD*=.66						
2．将来人から尊敬される仕事をしたい。	.78	.73				
4．将来人や社会のためになる仕事についていたい。	.55	.70				
3．将来他人に負けないように頑張りたい。	.51	.66				
1．将来出来るだけ高い学歴を身につけたい。	.62	.49				
家庭志向						
小；α=.69, *M*=3.26, *SD*=.69, 中；α=.82, *M*=2.99, *SD*=.88						
5．将来良い結婚相手を見つけて結婚したい。			.74	.81		
6．将来子どもを育てながら仕事をがんばりたい。			.63	.84		
7．将来平凡でも何事もなく穏やかな家庭を築きたい。			.60	.68		
金持ち志向						
小；α=.80, *M*=3.20, *SD*=.77, 中；α=.77, *M*=2.92, *SD*=.77						
9．将来高い報酬を得たい。					.87	.80
8．将来金持ちになって豊かな暮らしがしたい。					.78	.84
10．将来バリバリ働いてお金をたくさん貯めたい。					.64	.55
因子間相関　F1 良識・向上志向	—	—	.46***	.35***	.50***	.37***
F2 家庭志向			—	—	.38***	.20***
F3 金持ち庭志向					—	—

***p<.001

Table 2　平均値，標準偏差，及び分散分析の結果

	小学生		中学生		主効果		交互作用
	男子*N*=118	女子*N*=96	男子*N*=224	女子*N*=233	性差	小中の差	
	M *SD*	*M* *SD*	*M* *SD*	*M* *SD*	*F*値 (η^2)	*F*値 (η^2)	*F*値 (η^2)
良識向上志向	3.37 0.60	3.20 0.65	2.95 0.68	2.98 0.63	1.74 (.00)	35,86*** (.05)	3.59† (.01)
家庭志向	3.19 0.70	3.34 0.69	2.87 0.92	3.11 0.82	8.23*** (.01)	16.41*** (.02)	0.42 (.00)
金持ち志向	3.39 0.68	2.96 0.82	3.06 0.74	2.79 0.78	30.89*** (.04)	15.78*** (.02)	1.61 (.00)

***p<. 001　**p<. 01　† p<. 10

まず，小学生のデータを分析した結果(214人，回答率100.0%)，先行研究と同様な３因子に高い標準化推定値を示し，パス係数は全て有意(p<.001）であった（Table1)。モデルは一定の適合度が確認された(*CFI*=0.950, *NFI*=0.905, *RMSEA*=0.066)。３因子は互いに有意な正の相関があり，一定の内的整合性(良識・向上志向 α=.70, 家庭志向 α=.69，金持ち志向 α=.80）が得られたことから，先行研究と同様な因子構造であることが確認された。中学生向け将来志向性尺度は，小学生にも適用されることが示された。

次に，中学生のデータを分析した結果(457人，回答率98.0%)，先行研究と同様な３因子に高い標準化推定値を示し，パス係数は全て有意(p<.001）であった（Table1)。モデルは一定の適合度が確認された。(*CFI*=0.951，*NFI*=0.914, *RMSEA*=0.071)。3因子は互いに有意な正の相関があり，一定の内的整合性(良識･向上志向 α=.74, 家庭志向 α=.82, 金持ち志向 α=.77）が得られたことから，先行研究と同様な因子構造であることが確認された。

これらの結果より，中学生向け将来志向性尺度は，A・B小学校５～６年生214人とC・D中学校１～２年生457人の両者のデータに適応可能なことが確認された。

記述統計量

小学生のデータ，中学生のデータにおける，将来志向性の下位尺度得点(良識・向上志向，家庭志向，金持ち志向）の平均値と標準偏差を男女別に算出して以下に示した（Table2)。

性別，及び，小・中の学校段階の差の検討

将来志向性の性別，及びに，小・中の学校段階の差があるのかを検討するために，性別，小・中の学校段階別にその変数を独立変数とし，将来志向性の良識・向上志向，家

庭志向，金持ち志向を従属変数とした２要因分散分析を行った（Table2）。

その結果，良識・向上志向では，性別に有意な主効果は見られなかったが，小・中の学校段階の差に有意な主効果（F（1，667）=35.86，p<.001）が見られ，小学生の良識・向上志向が中学生よりも高いことが示された。交互作用には有意傾向が見られた（F（1，667）=3.59，p<.10）。家庭志向は，性別，小・中の学校段階の差に有意な主効果（順に（F（1，667）=8.23，p<.001；F（1，667）=16，41　1，667）=16.41，p<.001）が見られ，女子は男子よりも，小学生は中学生よりも，家庭志向が高いことが示されたが，交互作用は有意ではなかった。また，金持ち志向も性別と小・中の学校段階による差に有意な主効果（順に，（F（1，667）=30.89，p<.001；F（1，667）=15.78，p<.001）が見られ，男子は女子よりも，小学生は中学生よりも，金持ち志向が高いことが示されたが，交互作用は有意ではなかった。

上記の結果から，中学生の将来志向性の性差として，男子は女子に比べて家庭志向が低くて金持ち志向が有意に高いことが示された。小学生の性差は，中学生と同様に，男子は女子に比べて家庭志向が低くて金持ち志向が有意に高いことが示された。学校段階の差では，中学生は小学生に比べて，良識・向上志向，家庭志向，金持ち志向の得点が有意に低いことが示された。

さらに，導き出された上記の将来志向性の性別，及び，小・中学校の学校段階による差について，実質的な大きさを評価するために効果量（effect size）を算出した（Table2）。効果量の大きさの目安として，水本・竹内（2008）は，二元配置分散分析の主効果では，効果量の小（Small）としてη^2=.01，効果量の中（Medium）としてη^2=.06，効果量の大（Large）としてη^2=.14を目安として示し，交互作用の効果量の目安では，効果量の小（Small）としてη^2=.01，効果量の中（Medium）としてη^2=.09，効果量の大（Large）としてη^2=.25を示している。

本研究をこの効果量の目安に照らしてみると，金持ち志向における性差（η^2=.04）と良識・向上志向における学校段階の差（η^2=.05）で中程度の差が見られたが，その他の性差と学校段階の差には小さな差しか見られなかった。性別による差では，男子の金持ち志向が高いという性差（η^2=.04）に比べて，女子の家庭志向が高いという性差（η^2=.01）は小さかった。学校段階による差では，中学生になるにつれて，良識・向上志向，家庭志向，金持ち志向共に低下することが示されているが，良識・向上志向の低下の大きさ（η^2=.05）に比べて家庭志向（η^2=.02），金持ち志向（η^2=.02）の低下は少なかった。

考　察

本研究の目的は，先行研究（山上・相良，2019）の将来志向性の性差の再現性を検証するとともに，先行研究（都筑，2001；白井，1997）の「希望」で見られた年齢差が中学生の将来志向性でも見られるかどうかを，小学生との比較を通して検証し，中学生の将来志向性の特徴を明らかにすることであった。

性差と学校段階の差による統計的仮説検定，及び，その差の大きさを検討するための効果量検定の結果から，以下のことが明らかにされた。

Ⅰ．将来志向性の性別による差の検討

性別における統計的仮説検定の結果から，中学生の性差は，男子は女子に比べて家庭志向が低くて金持ち志向が有意に高いことが確認され，先行研究（山上・相良，2019）の将来志向性の性差の再現性が検証された。

また，良識・向上志向は，性別に有意な主効果は見られなかったが，交互作用には有意傾向ではあるが僅かな差が見られたため単純主効果の検定を行ったところ，小学生の性別に有意傾向の差が見られた。つまり，小学生の良識・向上志向は女子より男子に僅かばかり高い傾向があり，中学生には良識・向上志向の性差が見られないことが示された。

先行研究では元森が，「幸せになっているか？」「親を大切にしているか？」「多くの人の役に立っているか？」などの８項目を調査して，男子は社会貢献が，女子は家族との幸せな未来が，幸せの決め手としてあることに言及している。「男子は金持ち志向が高く女子は家庭志向が高い」ことを示した本研究の結果は，元森の希望の性差が具体的に見られた結果であると言える。

金持ち志向は，「高い報酬を得たい」「豊かな暮らしがしたい」「バリバリ働いてお金をたくさん貯めたい」など仕事や報酬を志向する項目で構成され，家庭志向は，「良い結婚相手を見つけて結婚したい」「子どもを育てながら仕事をがんばりたい」「平凡でも何事もなく穏やかな家庭を築きたい」など円満な家庭や育児を志向する項目で構成されている。本研究で見出された「男子は金持ち志向が高く，女子は家庭志向が高い」という性別における差の仮説検定の結果は，我が国における伝統的な性役割分業意識と一致するものである。これは，女性の社会進出，男女平等社会が取り上げられる今日であっても，男性は仕事をして高い地位や報酬を得たい，女性は仕事よりもよい家庭を築きたいという考え方が，中学生においても根強く存在していることが示されていると考えられる。

この結果から，以下の２点が推察される。１点目は，日本の社会を取り巻く男女の活躍の場のギャップという点で

ある。メディアにおいては男女参画の取り組みや女性の活躍が取り上げられ，中学生は，それらを日常的に目にしていることが考えられる。しかし，社会の中で活躍している女性がまだまだ稀有な存在であるという現状もしばしば取り上げられている。実際，中学校においては，校長，教頭，教務主任等の管理職は男性が大半を占め，管理主事訪問等で学校を訪れる教育委員会の指導主事等も圧倒的に男性が多いという現実を，中学生なりに敏感に感じとっていることが，本研究の結果に反映されているのではないだろうか。

２点目は，家庭における女性の家事労働の負担の多さという点である。共働き家庭の増加により，実際には，中学生は家庭で，仕事を持つ母親の姿を目の当たりにしていることであろう。母親が，仕事を持ちながら，家事，子育てと奔走する姿を日常的に見たり触れたりして，中学生なりに，母親，つまり，仕事を持つ女性の大変さを痛感しているため，女性が仕事をして高い地位を得るという考えを持ちにくいのではないだろうか。

一方，性差の大きさはどのくらいなのか，性差の実質的な大きさを評価するために，効果量を算出したところ，「男子は金持ち志向が高い」という性差には中程度の大きさの効果量が確認されたが，「女子は家庭志向が高い」という性差には小程度の効果量しか確認されなかった。この結果は，男子は年齢が上がるにつれて収入や大企業といった経済的安定志向が女子よりも強くなり，将来の家庭の経済的側面を担うという一般的な性役割の構図を示しているとともに，男子も家庭生活に無関心では済まされないといった現在の風潮を反映しているのではないかと考えられる。

Ⅱ．将来志向性の小・中の学校段階による差の検討

小・中の学校段階による差の検定から，中学生の将来志向性は，良識・向上志向，家庭志向，金持ち志向のいずれの下位尺度においても，中学生の得点が小学生に比べて有意に低いことが示された。本研究の結果は，将来への希望には年齢差があり年齢が上がるにつれて将来への希望が低下していくことを示した先行研究（都筑，2001；白井，1997）と一致することが示された。都筑（2001）らの先行研究は，希望という観点から年齢による差を明らかにしたものであり，希望だけでなく展望を含む将来志向性を扱った本研究の観点とは必ずしも同じとは言えない。しかし，結果としては将来志向性も希望も，どちらも時間的展望の中の情緒的側面から見た未来展望に属することから，年齢が上がるにつれて将来への希望が低下し，中学生の将来志向性も希望と同様に低下するという傾向が示されたと考える。

学校段階の差の大きさを検討するための効果量の検討結果から，年齢が上がるにつれて中学生の将来志向性が低下する傾向は，家庭志向と金持ち志向よりも，良識・向上志向に顕著にみられることが明らかにされた。良識・向上志向は交互作用が有意傾向であり，小学生女子に比べて男子の方が僅かに高い傾向が示されているが，中学生の良識・向上志向の性差は見られなかったことから，良識・向上志向の低下する幅は，男子が女子よりも僅かながらも大きいことが示された。つまり，小学生男子に見られた，人や社会のためになろうとする傾向が，中学生では薄れていくとともに，中学生男子は女子よりも金持ち志向が高いという結果から，男子は「人や社会のためになりたい」という公共に向けられていた視野が「高い報酬を得たい」「豊かな暮らしがしたい」といった現実性を重視する視野に変わってきているのではないかと考えられる。

良識・向上志向は，「人や社会のためになる仕事についていたい」「人から尊敬される仕事をしたい」など，他とのかかわりの中で人や社会のためになることを志向する項目で構成されている。本研究では，小学生から中学生への発達とともに，自分自身を客観的にとらえ，現実的な将来像を描こうとするために，人や社会のためになりたいと志向する傾向が薄れていくことが示されたといえる。

中学生という発達段階は，思春期独特の心身の急激な発達とともに，生活する学校という環境の変化とが同時平行的に起こることから，発達的危機が生じやすい時期であるとされている（都筑，2001）。未来への希望や夢を描き，肯定的な将来像を描きやすい小学生に比べ，中学生は自分自身を他と比べて客観的に評価することによって，「希望」にとどまらず，「展望」を含めた自分自身の将来を具体的に考えられるようになる。その結果，様々な葛藤に直面し，自分への自信を失い，肯定的な将来の夢や希望を持ちにくくなっているということが考えられる。現実的な将来像を描こうとする中学生にとって，その将来像が肯定的，意欲的でなくなることは，やむを得ないことなのかもしれない。そうした中学生ならではの将来志向性の特徴を理解して支援していくことが周囲の大人の役割として期待される。

Ⅲ．本研究の課題

本研究における問題点として，次の２点が考えられる。

１点目は，本研究が実施された時期の問題である。本研究は，2012年の中学生を対象としたデータを分析検討している。この研究は，2022年の現在とは10年の開きがあり，その間に，例えば，ひとり親世帯の増加，貧困問題の加速，コロナ渦等といったように，中学生を取り巻く情勢は大きく変容している。したがって，中学生自身の将来志向性にも大きな変化が生じているのではないかと推察される。本研究で得られた知見を汎用化するためには，さらに最新の

データを分析して，本研究の結果と比較検討してみる必要がある。

２点目は，地域性の問題である。本研究で使用したサンプルは部分的であると言える。調査対象としたデータはＸ県JR駅近郊の住宅地の同一地域から選択しているため，本研究の結果が都市部や他地域においても検証されるのかどうか，今後は，地域性を観点に性差や年齢差を多面的に検討することが必要とされる。

[1]Y市教育委員会学校支援課(2012)によって実施された「平成24年度生活･学習の意識調査」に基づいて比較検討を行った。

付記

本研究は，令和４年度聖徳大学大学院児童学研究科に提出した博士論文の一部について，加筆修正したものである。

謝辞

本研究を進めるにあたり，きめ細やかなご指導とあたたかな励ましで支えてくださった，聖徳大学児童学科教授の相良順子先生に心より感謝申し上げます。

引用文献

ベネッセ教育総合研究所(2022)．第一回子ども生活実態基本調査報告書.

原郁水・古田真司・松村常司(2011)．小学生のストレスへの感受性とレジリエンスがセルフエスティームに及ぼす影響　学校保健研究，53(4)，277-287.

日潟淳子(2016)．大学生の未来の視野の広がりと人生に対する積極性との関連　教育心理学大会第58回総会大会論文集，46.

日潟淳子・齋藤 誠一(2007)．青年期における時間的展望と出来事想起および精神的健康との関連　発達心理学研究，18，109-119.

金木智子・塚野州一(2002)．中学生における学校適応と自己意識の関係について　富山大学教育総合実践センター紀要，3，49，55.

国里愛彦(2021)．再現可能な心理学研究入門１　専修人間科学論集　心理学篇，1，10.

松田浩平・佐藤恵美(2013)．大学生の生き方と将来へのイメージ１　―将来展望から見た生き方尺度の因子構造―　日本心理学会第77回大会論文集，45.

水本篤・竹内理(2008)．研究論文における効果量の報告のために―基礎的概念と注意点―　英語教育研究，31，57-66.

三浦麻子(2017)．心理学界における再現可能性問題への取り組み　日本心理学会論評，9-12.

南学(2015)．現代の若者の価値観と主観的幸福感の検討１　三重大学教育学部研究紀要，66，教育科学，171－178.

元森恵理子(2009)．第２回子ども生活実態基本調査　ベネッセ研究所報，49，130-145.

森口佑介(2016)．発達科学が発達科学であるために―発達研究における再現性と頑健性―　心理学評論, 59, 1, 30–38.

永田正明(2020)．進路成熟度に影響する要因の探索的検討　第一工業大学研究報告，32，97-102.

内閣府(2020)．特集1子ども若者の意識と求める支援について 令和2年度版子ども・若者白書.

内閣府(2014)．平成26年版子ども・若者白書(概要版)―特集今を生きる若者の意識～国際比較からみえてくるもの―　内閣府，子ども・若者白書，子ども・若者育成支援課.

西村多久磨・鈴木高志・村上達也・中山伸一・櫻井茂男（2017)．キャリア発達における将来目標の役割 -生活満足度 学習動機づけ 向社会的行動との関連から-　筑波大学心理学研究，53，81-89.

落合良行・伊藤裕子・齋藤誠一(2008)．青年心理へのアプローチと課題　ベーシック現代心理学４　青年の心理学(改訂版)，25-50，有斐閣.

Oettingen，G.，& Mayer，D.(2002) .The Motivating Function of Thinking About the Future : Expections Versus Fantasies. Journal Personality and Social Psychlogy，83，1198-1212.

白井利明(1997)．時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房.

鈴川由美・豊田秀樹(2011).『認知科学』における効果量と検定力とその必要性　認知科学，18(1)，202-222.

田中輝美(2018)．未来イメージによって誘導される未来展望と抑うつ傾向の関連　イメージ心理学研究，16，39－47.

陳晶晶・茂呂雄二(2016)．児童・生徒の未来展望尺度の開発及び未来展望と学校不適応感との関連　発達心理学研究，27，115-124.

飛永佳代(2007)．思春期・青年期における未来展望の様相の発達的検討―希望と展望という視点から―　九州大学心理学研究紀要，8，165-173.

都筑学(1982)．時間的展望に関する文献的研究　教育心理学研究，30(1)，73-86.

都筑学(2001)．小中学生における時間的展望の横断的分析 日本教育心理学会総会発表論文集(43)，24.

山上寛子･相良順子(2019)．中学生向け将来志向性尺度の作成　青年心理学研究，30，141-151.

山本登・岩元澄子・原口雅浩(2012)．青年期における未来展望と進路選択に対する自己効力感および一般性自己効力感との関連　久留米大学心理学研究，11，102-107.

山本ちか(2011)．高校生の時間的展望と自己評価の関連―全体的自己価値，具体的側面の自己評価・具体的側面の重要度の観点から―　名古屋文理大学紀要，11.